

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320123

研究課題名(和文) 中世における合戦の記憶をめぐる総合的研究 長篠の戦いを中心に

研究課題名(英文) A comprehensive study of how pitched battles in Japan's Middle Ages were remembered, with a particular focus on the Battle of Nagashino

研究代表者

金子 拓 (KANEKO, Hiraku)

東京大学・史料編纂所・准教授

研究者番号：10302655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,200,000円

研究成果の概要(和文)：天正3年(1575)5月21日に起きた長篠の戦いについて、織田信長・徳川家康軍および武田勝頼軍に所属してこの戦いに参加した諸家の末裔に残る家譜・系図・由緒書などの調査をおこない、これを収集した。また、長篠の戦いに関する古文書の調査(永青文庫所蔵細川家文書など)をおこなった。江戸時代になってから長篠の戦いを描いた合戦図屏風について、複数存在する作品を熟覧し、とくにこれまで研究がなされてこなかった東京国立博物館所蔵本について詳細な検討をおこない、論文として発表した。以上の成果について、時々講演などで一般に報告したほか、長篠の戦いの地元愛知県新城市において成果報告シンポジウムを開催した。

研究成果の概要(英文)：We investigated historical materials to remain to the descendant of the military commander who belonged to the Nobunaga Oda, Ieyasu Tokugawa forces and the Katsuyori Takeda forces. The historical materials that we investigated are a family tree, an ancestral biography. In addition, we investigated ancient documents related to a fight of Nagashino. For example, it is the Hosokawas document to have investigated. There are multiple screens which were drawn about a fight of Nagashino after it is the Edo era. we investigated these carefully. I performed detailed examination about a screen of the Tokyo National Museum possession that enough studies had not been accomplished particularly until now. And I announced the result as an article. I reported these result to general people by lectures to time. In addition, we held a result report symposium in Shinshiro-shi, Aichi where there was a fight.

研究分野：日本中世史

キーワード：史料学 合戦 画像史料 記憶 歴史認識

1. 研究開始当初の背景

歴史学・社会学などの学問分野において、「記憶ブーム」と呼ぶべき歴史認識論の高まりが見られた(エヤル・ベン-アリ「戦争体験の社会的記憶と語り」、関沢まゆみ編『戦争記憶論』昭和堂、2010年)。実際「記憶」を冠した書物・論文が次々と発表され、学問的・一般的関心の高さと、研究のエネルギーの強さが実感される。

これらの研究はほぼ例外なく近代の戦争にまつわる記憶を対象としたものである。とりわけわが国では、1945年の第二次大戦敗戦から65年(研究開始当時)が過ぎ、当時の戦争を体験(加害者・被害者、被災者など)いろいろな立場がある)した世代が加齢により減少しつつあることに加え、被爆体験、被侵略国との関係、教科書表現をめぐる対立など、さまざまな要素がからみあい、これら戦争の記憶を風化させることなく、「歴史」として後の世代に伝えなければならないという意識が高まった結果、記憶をめぐる研究を活性化させているように思われた。

さらに2011年3月11日に発生した「東日本大震災」という未曾有の大災害を経験したことにより、これらを体験した人びとの「記憶」をさまざまなかたちで情報(史料)とすることで、それらを未来に残していこうという意識がいつそう強く働くようになった。

これらの研究や動向により、ある社会集団のなかで、一人一人の人間の記憶(生物学的記憶)がどのように社会化され、集団構成員の共同記憶(社会的記憶)となって受けつがれていくのかを明らかにするための方法論が鍛えられつつあった。歴史学における先駆的かつ代表的研究がピエール・ノラに代表される「記憶の場」をめぐる研究であろう。

記憶を歴史学の研究として取り上げるにあたっては、わが国の前近代史研究にも独自の研究視角があることにも注意している。「由緒論」と呼ばれる研究潮流がそれである。主として近世村落などの社会集団が一定の権利を主張するために形成され、集団構成員によって共有され、彼らが依拠した歴史認識がそれであり、近世は「由緒の時代」(久留島浩「村が『由緒』を語る時」、久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団』山川出版社、1995年)であったという主張もなされているほどである。またこれら由緒研究のなかから、羽賀祥二『史蹟論』(名古屋大学出版会、1998年)のような研究も生まれた。近世の各地で建立されるようになる記念碑・顕彰碑などが、地域権力・地域集団の歴史認識・アイデンティティを確立する役割を担うという主張は、「記憶の場」論とも通じあうものである。

これら社会的記憶は、ある種の歴史認識と言い換えてもいい。歴史認識は、その考え方を共有する社会の性質、あるいは時代の動向によって常に変化することが予想される。ある歴史認識が、移りゆく時代の流れのなかで

いかなる変貌をとげてゆくのか、申請者は『信長記』という織田信長の事蹟を記録した書物の成立と伝来を明らかにするなかで、この問題に強い関心を持つに至った。(金子拓『織田信長という歴史』勉誠出版、2009年。2007～2009年度科学研究費基盤研究(C)の研究成果)

2. 研究の目的

本研究では、研究開始当初の背景で述べたような記憶をめぐる世界的な研究動向に学びつつ、まず大きくは、わが国前近代における戦い(合戦)をめぐる記憶のあり方を、関係史料を積み上げることで明らかにするという目標を立てた。

16世紀(安土桃山時代)における激しい時代の変化のなかで起きた合戦は、その時代を体験した人びとによってどのように記憶され想起され、あとの時代の人びとによって記録されていったのか。一定の歴史的・社会的条件の下におかれた人間がみずからの記憶をいかに記録し、それがまた別の条件下にある後の世にいかに伝わり、取捨され「歴史」となっていったのか。

このような問題を考える素材は、現代以外にも見つけられるものとする。数多くの戦いが発生し、その戦いに関係する数多くの記録(それは後世「由緒書」や「系図」「家譜」といった史料の様式で作成された)が成立した中世末から近世初頭にかけての史料を分析することも有効である。以上のような問題意識から、本研究では、中世後期から近世初期にかけ、とりわけ16世紀を中心とした合戦をめぐる史料について、文献史料・画像史料といったジャンルを問わず収集・研究し、上記のような人間の記憶の作用、文字(史料)となった記憶がいかに歴史となっていったかを明らかにしていきたい。

3. 研究の方法

検討の中核にすえるのは、天正3年(1575)に三河国長篠・設楽原(現愛知県新城市)で起きた織田信長・徳川家康連合軍と武田勝頼軍との交戦「長篠の戦い」である。長篠の戦いを選んだのは、勝利を収めた側である徳川家康のちに将軍となり政権を握ったため、徳川氏関係および、合戦に参加した家康家臣の家の記録が多く残っているであろうこと、合戦図屏風として著名な犬山城白帝文庫所蔵屏風・徳川美術館所蔵屏風などを対象として、近年長篠合戦図屏風の成立についての研究が著しく進展していること、おなじく近年編纂刊行された『愛知県史』『山梨県史』などの自治体史により、合戦に関係する一次史料が良質なかたちで提供されたこと、以上のような研究成果を検証し、政治的な流れを踏まえたうえで、合戦の歴史的経過、また合戦の記憶をめぐる社会的変遷を明らかにするための研究基盤が整いつつあるからである。近年古戦場の真ん中を東西に横断するか

たちでバイパス道路が完成し、さらに現在、古戦場の北に第二東名自動車道を建設する工事がおこなわれていることにより、古戦場景観の変化（破壊）が現実のものとなっている。織田信長が武田軍を迎え撃つために構築したと言われる馬防柵復元など、古戦場の保存に取り組み、長篠の戦いの歴史的意義を重視する新都市と連携しながら、屏風および近世に作成された現地の古地図や合戦図（布陣図）などを画像史料として分析することにより、時間が経過したことで変化した景観と、合戦がおこなわれた記憶を有する人びとがイメージした往年の合戦の姿との間にあるズレ（出来事と歴史認識のズレ）が明らかになるだろう。

以上のような方法により集めた史料を検討していくなかで、合戦をめぐるさまざまな事象が後世の人びとによっていかに伝えられていったのか（いかにして歴史になったのか）という「社会的記憶」のありさまが明らかとなり、史料としての記憶の分析が前近代の史料を対象とすることも可能であることを証明したい。

4. 研究成果

上記の研究目的・方法にしたがい、長篠の戦いを中心とする文献史料・画像史料の収集と調査検討を行なうとともに、その都度研究分担者・連携研究者・研究協力者が参加する研究会を開催して、情報の共有と調査研究内容の報告をおこなった。

調査先は次のとおりである。

文献史料

- ・大分県中津市・中津城（奥平家）
- ・熊本県熊本市・熊本県立美術館（細川家）
- ・長崎県島原市・島原松平文庫（島原松平家）
- ・徳島県徳島市・徳島大学附属図書館（蜂須賀家）
- ・和歌山県和歌山市・和歌山県文書館（紀伊徳川家）
- ・山形県米沢市・上杉博物館（上杉家）
- ・大分県臼杵市・臼杵市立臼杵図書館など（稲葉家）
- ・鳥取県鳥取市・鳥取県立博物館（池田家）
- ・山形県鶴岡市・致道博物館（酒井家）

画像史料

- ・犬山城白帝文庫
- ・大阪城天守閣
- ・東京国立博物館
- ・豊田市郷土資料館
- ・松浦史料博物館

文献史料の調査収集では、諸大名家において編纂成立した家譜や、家臣たちに提出させた由緒書上の収集、分析などを通し、それぞれの家において長篠の戦いがいかなる意味を持っていたのかを検討する史料的基盤を整えた。まずは研究分担者谷口がこのなかで奥平家に関わる「長篠の戦いの記憶」を分析し、同家にとっての長篠の戦いの意義について明らかにした。

古文書については、熊本県立美術館・熊本大学附属図書館・永青文庫におもむき、長篠の戦いに関係する貴重な一次史料として知られる「細川家文書」の織田信長発給文書を調査し、さらにそれぞれの料紙の紙質調査などもおこなった。その成果は2014年秋に熊本県立美術館において開催された「信長の手紙」展に活かされた。

最終年度には、長篠の戦いの古戦場が所在する愛知県新都市において公開シンポジウムを開催し、地元的一般市民をおもな対象として研究成果をわかりやすく報告した。ここでは、合戦に参加した織田・徳川・武田それぞれの立場にとっての長篠の戦いの意義や、長篠の戦いを知るための史料である合戦図屏風（研究分担者高橋）・近世軍記（研究分担者柳沢）を分析することで、後世江戸時代の人びとが長篠の戦いをどのように認識していたのかを明らかにした。

また、研究協力者として参加した新都市設楽原歴史資料館湯浅大司氏により、江戸時代に制作された古戦場付近の絵図の分析がなされ、できるかぎり合戦当時の景観復元が試みられたうえで、明らかになった古戦場の地理的条件（たとえば古戦場付近は大部分がぬかるんだ湿地帯であり、地盤が固く騎馬攻撃できる地点が限られていたことなど）が戦いにかなる影響を与えたのか、これまで認識されていなかったことが報告された。これらも、地域の視点を重視して取り組んだ本科研の大きな成果のひとつである。

合戦図屏風については、おもに東京国立博物館所蔵本の分析に取り組み、この屏風が江戸幕府將軍徳川家斉の命によって、幕府奥絵師木挽町狩野家に制作が命ぜられ、数代にわたって制作が続けられた（しかし下絵のまま残された）ことを明らかにするとともに、従来知られてきた屏風（犬山城白帝文庫所蔵成瀬家旧蔵本）などとの絵柄の違いに注目することで、江戸時代の人びとが長篠の戦いに抱いていたイメージとその情報源などについて明らかにした。

当初の計画のひとつとして、新都市などと連携し、研究成果を盛り込んだ長篠の戦いの情報を端末に表示させるような、地理情報システムを用いた古戦場案内地図の作成を目指していた。しかしこの計画は、文献史料の収集分析に大きく比重を置いてしまったこと、画像史料の基礎的な分析とその報告にとどまざるをえなかったことで、収集した写真・情報を既存のフリーソフトを用い仮に情報表示させるだけの段階にとどまった。この点は掲げた課題を十分に実現できなかったものとして反省している。

なお本科研の成果について、研究分担者・連携研究者ほか参加者個々の論文をまとめた書物を勉強出版から刊行予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

- (1)柳沢昌紀「細川幽斎の紀行文をめぐって」(『文化科学研究』27、2016年、査読無)
- (2)金子拓「東京国立博物館所蔵長篠合戦図屏風について」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』71、2015年、査読無)
- (3)金子拓「島津家文書「大坂御弓箭ノ時御城ノ絵図」について 大坂冬の陣の一齣」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』70、2015年、査読無)
- (4)鴨川達夫「武田信玄の「西上作戦」を研究する」(『東京大学史料編纂所研究紀要』25、2015年、査読無)
- (5)黒嶋敏「島津義久文書の基礎的研究」(同上)
- (6)金子拓「久我晴通の花押と文書」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』66、2014年、査読無)
- (7)遠藤珠紀「東京大学史料編纂所特殊蒐書徳大寺家本「古キ文」の紹介」(『古文書研究』78、2014年、査読無)
- (8)川戸貴史「奥羽仕置と会津領の知行基準」(『史学雑誌』123-4、2014年、査読有)
- (9)金子拓「誠仁親王の立場」(『織豊期研究』15、2013年、査読有)
- (10)金子拓「奥平家に伝わる鳥居強右衛門磔殺図について」(『新城市設楽原歴史館研究紀要』17、2013年、査読無)
- (11)谷口央「中津城奥平家文書について「家譜」に見る長篠の戦いの意味」(同上、査読無)

〔学会発表〕(計 9 件)

- (1)金子拓・谷口央・高橋修・柳原昌紀・鴨川達夫・湯浅大司「東京大学史料編纂所特定共同研究シンポジウム「長篠・設楽原の戦いを考える」(2016年2月21日、愛知県新城市・新城文化会館)
- (2)柳沢昌紀「細川幽斎の紀行文をめぐって」(中京大学文化科学研究所フォーラム、2015年2月12日、愛知県名古屋市・中京大学)
- (3)山田貴司(研究協力者)「細川家伝来文書にみる信長文書論の現在地」(同上)
- (4)柳沢昌紀「細川幽斎『九州道の記』の成立」(中京大学文学会秋季大会、2014年11月8日、愛知県名古屋市・中京大学)
- (5)黒嶋敏「信長の武威と軍記世界」(軍記・語り物研究会、2014年7月20日、東京都千代田区・明治大学)
- (6)谷口央「浜名郡と中世末期から近世初期の地震」(前近代歴史地震史研究会、2013年11月4日、新潟県新潟市・新潟大学)
- (7)金子拓「秋田藩の修史事業と梅津家の文書 梅津憲忠宛佐竹義宣書状をめぐって」(秋田大学史学会、2013年9月21日、秋田県秋田市・秋田大学)

(8)柳沢昌紀「細川幽斎『九州道の記』の草稿と出版」(写本・版本ケンブリッジ国際集会、2013年7月12日、イギリス・ケンブリッジ大学)

(9)金子拓「誠仁親王の立場」(織豊期研究会、2012年11月23日、愛知県名古屋市・名古屋大学)

〔図書〕(計 7 件)

- (1)金子拓(共著)『東北の中世史4 伊達氏と戦国争乱』(吉川弘文館、2015年、120-151頁)
- (2)金子拓『織田信長権力論』(吉川弘文館、2015年、総頁427頁)
- (3)金子拓『織田信長 天下人の実像』(講談社、2014年、総頁296頁)
- (4)谷口央編『関ヶ原合戦の深層』(高志書院、2014年、総頁226頁)
- (5)谷口央『幕藩制成立期の社会政治史研究 検地と検地帳を中心に』(校倉書房、2014年、総頁342頁)
- (6)黒嶋敏『海の武士団 水軍と海賊のあいだ』(講談社、2013年、総頁236頁)
- (7)金子拓編『信長記』と信長・秀吉の時代』(勉誠出版、2012年、総頁332頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
金子拓(KANEKO, Hiraku)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：10302655

(2)研究分担者
高橋修(TAKAHASHI, Osamu)
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：40334007

谷口 央 (TANIGUCHI, Hisashi)
首都大学東京・人文科学研究科・教授
研究者番号：90526435

柳沢 昌紀 (YANAGISAWA, Masaki)
中京大学・文学部・教授
研究者番号：60267896

(3)連携研究者

山田 邦明 (YAMADA, Kuniaki)
愛知大学・文学部・教授
研究者番号：60174710

鴨川 達夫 (KAMOGAWA, Tatsuo)
東京大学・史料編纂所・教授
研究者番号：60214566

渡邊 正男 (WATANABE, Masao)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：80230994

黒嶋 敏 (KUROSHIMA, Satoru)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：90323659

及川 亘 (OIKAWA, Wataru)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：70282530

藤原 重雄 (FUJIWARA, Shigeo)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号：40313192

須田 牧子 (SUDA, Makiko)
東京大学・史料編纂所・助教
研究者番号：60431798

遠藤 珠紀 (ENDO, Tamaki)
東京大学・史料編纂所・助教
研究者番号：10431800

川戸 貴史 (KAWATO, Takashi)
千葉経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：20456289